

カンボジア スタディ・ツアー



豊かな国の人から貧しい国の人のために 寄付をすべきか—

本学4名の学生がツアーに参加。体験を通して得た、回答とは？

8/20

プノンペン市街見学

富裕層住宅街とスラム街、イオンモール、バンケンコン市場
JICAカンボジア事務所訪問



←上段左 3枚：
ビルが建ち並ぶ
プノンペン市街と
高級住宅街の一角



8/21 アンコールワット、アンコールトム見学

8/22
NPO法人SALASUSU見学

工場見学、従業員の自宅訪問

バイヨン中学校の活動見学、同村水質調査へ同行
名古屋環未来研究所の「生物ろ過システムを活用した集落水道構築支援による生活衛生改善事業」を視察

←下段左4枚：
ゴミ山付近の
スラム街

スラム街の子供
たち



右→
バイヨン中学校の学生が
農村部家庭に、生活衛生
の大切さを説明

←左
経済的に困難な女性たち
が働く工房SALASUSU

8/23 JICA海外協力隊員との面会、対話

8/24

キリングフィールド見学、トウレスレン虐殺博物館見学、王宮、
シルバーハゴダ、国立博物館、セントラルマーケット、ワットプノンペン見学

右→
井戸水の水質調査



左から
首藤沙英（建築3年）藤城万凡（環境2年）
建部一翔（機械3年）河合真子（応用4年）
引率：鈴木祐丞 助教（教育センター）

“すべき”ではない。したい、
必要だ、と考える人がすればよい。

カンボジアを直接見て強く感じたのは、この国の中途半端さだ。日本初め先進国の支援を、政府は中心部及び経済発展に使っており、周辺農村には目を向けていない。

どれだけ各国のNPO、NGOが農村の生活改善支援を図っていても、国をつくる側の問題意識が低く、変化がなければ、根本的解決へと繋がらない。

どこまで干渉してよいのか、サポートとしての役割を死守すべきなのか、今後の国際協力での重要なポイントだと思う。次は年単位で滞在し、間近でカンボジアの発展に関わりたいと思っている。

（応用4年 河合真子）

絶対的貧困の人に、一人で自分の人生の
プランニングが行えるまでを支援。

JICAの方の、「他国支援は、当該国民が受動的にならぬよう、あくまで“援助”であるべきで、自分たちが“主役”になってはならない。どこまでが“援助”でどこからが“主役”になってしまうのが難しく、自ら問い続けながら仕事をしている」という話がとても印象に残った。

寄付は、自分自身の生活や生き方を変えてまで行うものではないと考える。また、人が人として生活できる最低限のライフラインを整えるための寄付は必要であり、それらの人々が自分の人生のプランニングを行えるところまで支援すべきだと思う。

（機械3年 建部一翔）

支援は必要だが、義務ではない。

都市部と農村部の格差をなくすことへの支援は必要だ。特に生活に必要な電気や水道設備、小・中学校の就学率100%は、最低限達成すべき課題だ。

ただ、人は支援されるのが当たり前になると、自力で生活することを諦めてしまう。そのため、寄付を義務化すると「支援」ではなく「援助」となり、その国の人々に悪い影響を与えてしまう。

私にとって寄付する側は、自分で生活を立て、生活に余裕がある人が行うものであり、義務であってはならないと考える。

これを機に、今後カンボジア以外の国にも行き、様々な視点から世界を見てみたいと思う。

（建築3年 首藤沙英）

しなければならないと考える。

JICAやNGOで働く人々は強い意志と使命感を持って活動していた。国際協力活動に参加してみたいが、今の自分では足手まといで中途半端に終わる。実際に水質調査に参加して、支援の分野は広く、いろんな方法があることを知ったので、今自分ができることは、まず大学での勉強に励み、専門的な技術や考えを身につけることだと思った。

寄付は、義務化まではいかずとも、しなければならないものだと思う。寄付する前に、支援する国の状況、どの団体に寄付するとどのような支援に使われるのかを調べ、目的を持って寄付することが大切である。

（環境2年 藤城万凡）